

『この愛にひざまずけ』

著：早水しほり

ill：桜城やや

「今日からおまえが、うちの顧問弁護士だ」

冬紀の話を聞いて、どこをどうしたらそういう結論が出てくるのか。

「ふざけるな！ 全然わかってないだろ。人の話を、ちゃんと聞け！」

手に取った茶碗を思わず三虎に投げつけそうになった冬紀だが、それが三百万円ほどする古(こ)伊(い)万(ま)里(り)の器だということに気がついて、ギリギリのところで踏みとどまった。

それに、冬紀を警戒しているわけでもないのだろうが、曾我部がちゃっかり茶室の隅に控えている。二対一では、ただでさえ分が悪い。

苛立ちのあまり、畳表を掻きむしりそうになる。

「ふざけてない」

三虎は、自分の碗の中身を干した。

「おまえの話も、よくよく聞いたさ。おまえは勤め先をクビになり、マンションを追い出されたんだろう？ だったら、俺のところに来い。なんなら、この家に住まわせてやる。母屋が気に入らなかつたら、中庭の築(つき)山(やま)壊してもう一軒建てるか」

「だから、誰がそういう話をしているんだ…！ だいたい、マンションの荷物は実家に運んだ後だ！ 引っ越し代払えよ」

冬紀は、切れ長の目元を吊り上げた。

「責任は取るって言ってるんだろが」

三虎は肩を竦(すく)める。

「往生際が悪いぞ、冬紀。この俺が、直々にスカウトしてやってるんだ」

「他探せ、他」

「俺が、おまえがいろいろ言ってるんだぜ、冬紀？」

三虎の声が、低くなる。

「ガキの頃から、決めていた」

「勝手なこと言うな！」

「いい加減に観念しな」

三虎が、膝を進めてくる。

「おまえは、俺のものなんだよ。俺の元に、来る運命だったんだ」

「だから、ふざけるなと言ってるだろ…！」

冬紀の体は、怒りのあまり震えてしまう。

過去、さんざん迷惑をかけられ、恋人を奪われ、とうとう職場とマンションまで追い出されてしまったのだ。

(これが怒らずにいられるか…っ！)

今にも掴みかかりそうな形相になっている冬紀の顔を、じっくりと眺めていた三虎は、急に真顔になった。

「仕方ないな」

眼光が鋭い。

ぎらつく光。

そして、三虎は息を吐く。

「おまえには、やっぱ体から教えてやるしかないのか。俺も、そろそろはつきりさせなきゃいけないとは思っていたが」

「何言ってるんだ！」

何が、俺のものだ。

何が体から教えてやる、だ。

(…ん？ 体から教える…?)

冬紀が頭を傾けた、その時だ。

いきなり、背後で人の気配がする。

「…！」

冬紀は振り返り、目を瞠(みは)る。

曾我部が、音もなく忍び寄ってきていた。

「曾我部さん…!？」

そして、彼は冬紀のことを羽(は)交(が)い締めにする。

「失礼します、冬紀さん」

曾我部が、低い声で囁く。

「な…っ」

冬紀は、三虎を振り返る。

曾我部が、三虎の指示なしで、こんなことをするなんて考えられない。

「なんのつもりだ！」

冬紀は、曾我部の腕を振り解こうと、暴れる。

「おとなしくしてな、冬紀」

三虎は意外に器用な手つきの大きな手で、冬紀のネクタイを解く。

そして、冬紀の後ろに回ると、曾我部に冬紀の体を押さえ込ませたまま、冬紀の両手の手首を一つに括(くく)ってしまった。

「…三虎？」

今まで、三虎相手に身の危険を感じたことはない。

けれども、さすがに今度ばかりは冬紀も、不安で声を震えさせた。

「安心しろ、冬紀。俺は上手いからな」

冬紀の手首をきつく縛り上げた三虎は、微かに痛みを感じているそこを軽くさすった。

「おまえ、何言って…」

何を言われているのかも、何をされようとしているのかもわからなくて、冬紀の胸には不安の暗雲が立ち込め始めた。

「これは契約の儀式みたいなもんだ。いや、固めの盃(さかずき)の代わりかねえ。だから、曾我部が見ていても、気にするなよ」

「だから、何を…」

言いかけた言葉の続きは、三虎の唇に奪われる。

彼の、情熱的な口づけに。

「んぐ…っ」

冬紀は、くぐもった呻き声を漏らす。

そのまま、畳の上に押し倒されてしまった。  
(何するんだ！)  
手は縛められ、肩を曽我部に押さえつけられている。  
絶対絶命。  
これじゃ、洒落(しゃれ)にならない。

本文 p44～49 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>